

ポテブニャーとロシア象徴主義

柿 沼 伸 明

ロシアの象徴主義者は詩の創作活動に携わるとともに、ロシア詩の遺産を分析し、詩の発生過程を意識化し、言葉を操る自らの芸術行為を正当化できるような学的根拠を開拓することにも意を注いだ。この探求の過程で、言葉とは古代人の現実認識を示す生き生きとした表象を残存させた詩的な創造物であると主張するポテブニャー（Александр Афанасьевич Потебня, 1835-1891）の言語理論は象徴主義者を大いに魅了した。ブスラーエフ、アフアナシエフ、ポテブニャー、ヴェセロフスキイと続くフォークロア学の伝統は、西欧講壇哲学の新カント派と並び、19世紀末から20世紀初めにかけてのロシアで著しい影響力を誇った。象徴主義者達はこうした自国のフォークロア学の権威に依拠して自己の創作行為の理論化を試みた。ポテブニャーは、他の三人のフォークロアの碩学と比較すると、ハリコフという文化の周縁部で活動したため、当時は知名度に欠けていたが、死後、ハリコフ大学の彼の弟子達による普及活動のおかげで文学界でも次第に脚光を浴びるようになる。ポテブニャーの言語理論は、言語生成の仮説作業に基づいて言語と認識の相互作用という問題を照射しており、その論点は現代の記号論や認知科学がとりあげる問題にも触れる。彼を初期のロシア人記号論者に数える研究者もいる。¹ この面でポテブニャーの言語哲学をもっとも明瞭に表白している本は『思考と言語』² である。そこに述べられたポテブニャーの論考を要約し、ブリュースフ、ベールイ、Вяч. イヴァーノフにおけるその受容の様相を検討することが本稿の課題である。

1. 『思考と言語』の論旨要約

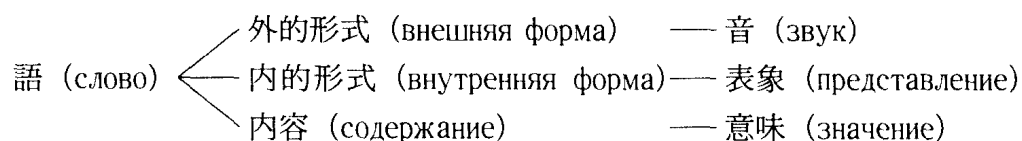
1. 1. 言語の生成

ポテブニャーの言語観は完全に唯物論的枠組みのなかに置かれている。言語³を神からの賜物や人間理性の合理的産物とする見解を斥け、さらにはフンボルトの言語観に触れて、言語が産物（エルゴン）でなく創造的活動（エネルギー）であるという彼の定義を評価しながらも、「言語自体」が客観的实在

ポテブニャーとロシア象徴主義

として存在し、人間精神を通じて流出（Emanation）しているという発想には反対する。ポテブニャーの考えでは、言語発生以前にも原始的な社会集団がすでに存在し、その協働活動の過程において相互意思伝達の媒体として言語が創造され、発展させられてきた。⁴

ポテブニャーは言語の発達を三段階に分けている。第一段階では、語彙のうちでもっとも原初的な語が間投詞から形成された。間投詞は感情表出（патогномический）の機能をもち、原始人が未知のものに遭遇したとき思わず識らず発した音（間投詞）が、まず発声した個人の内部で指示物（レフェレント）と恒常的に結び付けられるようになり、そうした主観的に使用された語から社会集団の成員すべてに共有される意味作用をもつ客観的な語へと成長する。この際、分節的な音声と意味が結合するための媒介となるのが「表象 представление」だとポテブニャーは主張する。例えば、原始人が火に触れ Ax! と発声したと仮定する。彼がこの Ax! を火とは全く関係のない状況で再び発声したとき、その音は彼の脳裡に火に触れて熱いと感じたときの状況と火そのものに対する視覚的記憶を呼び覚ます。時間がたつにつれ、具体的状況のなかで目にした火の直接的な映像（образ）の記憶は薄れ、個人意識の内部で変形させられた火の表象だけが残る。この心理過程をポテブニャーは「統覚 апперцепция」と名づける。Ax! という音による火の表象喚起が連続的に行なわれた場合、Ax! は火の表象を仲介として火という意味を獲得する。つまり、ポテブニャーの分類法によると、語は音（語の外的形式）と表象（語の内的形式）⁵ と意味（語の内容）という三要素から構成されている。



間投詞から発生したもっとも原初的な語彙はその後の語形成における語根となる。これが第二段階である。音と意味の結合が固定した数少ない語同志をうまく組み合わせ、いまだ命名されていない物事に適用していく行為が、語形成・語彙増殖の鍵となる。これは未知の事象を既知の事象で置き換える暗喩（メタファー）の作用に他ならない。暗喩においては、二物 AB の類似関係に基づき、A を B で置き換える（「美女の双眸から落ちた真珠」という表現では、涙 [A] を真珠 [B] で置き換えている）。同様に、古代人が未知の事象に名を与える場合、この事象が内包する無数の属性のうちから一つを抽象し、それと

柿沼伸明

同じ属性をもつ既知の命名された事象に結びつけ、後者の語成分を利用して前者を名づける。この属性抽象作用は表象操作によって行なわれる。命名が完了すると、どのような属性が抽象されたかが、語の内的形式（表象）として記憶される。つまり、この場合に使われる語の内的形式（表象）とは、語の語源的意味を指す（言語生成の第一段階と第二段階では、「内的形式（表象）」という術語の意味内容が異なる）。例えば、「熊 медведь」は、その無数にある属性のうちから「蜜を食べるもの едящий мёд」という属性のみが命名時に抽象され、この「蜜を食べるもの」という表象が медведь という語の内的形式となる。⁶

言語発達の第三段階では、語における音と意味の結合が自動化し、第一段階のようにいちいち表象を仲介とする必要がなくなってくる。時代を経るにつれて、語が内的形式として包含している表象は忘却され、結局は絶滅する。つまり、語の発生（命名）の契機となった表象は消失し、語はその使用者にとって音と意味が機械的・恣意的に固結しただけの「記号 знак」に変化する。同じく、命名された事象には、語の内的形式として代表される表象に限らず無数の属性が帰せられるようになり、これら属性の総体は「概念 понятие」と総称され得るようになる。時間の節約と思考速度の増大という観点から、ポテブニャーはこうした推移を必然と見なす。ソシュールの二分類（記号表現と記号内容）は、ポテブニャーの論に従うと、この第三段階で初めて可能となる。

1. 2. 言語発達にともなう思考形式の変容

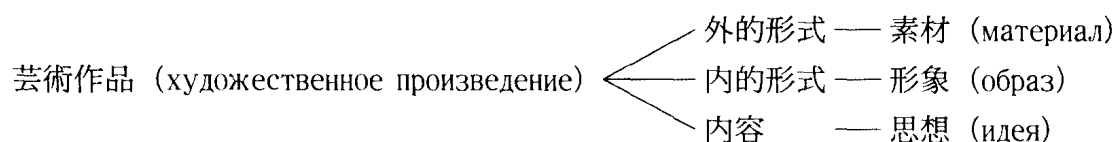
命名行為をおこなう古代人は、未知事象と既知事象の類似性に着目し、個別を個別によって置き換える暗喩の働きを実践していることになる。彼らは表象を使って、未知事象を既知事象に置換してものを考える。言語がいまだ記号と化しておらず、外界内界の認識領域が限局された状況では、このような「形象的メタファー思考 образно-метафорическое мышление」が古代人にとって唯一可能な思考方法であるとポテブニャーは主張する。この古代人特有の思考形式は新語造成の場合だけに発揮されるわけではなく、認識対象すべてに向けられており、叙事詩、童話、神話、俚諺格言はその直接的産物である。暗喩の眼鏡を通して森羅万象を理解する古代人は、現代の我々からすると、詩的な世界感覚のうちに生きていたと言える。言語が内的形式を消失した記号体系へと変化すると、人間は表象のない概念そのものを操作して思考することができるようになる。これは「概念思考 понятийное мышление」と呼ばれる。概念思考は、古代人の詩的な世界感覚を喪失させる反面、科学的な世界認識の基盤となる。メ

ポテブニャーとロシア象徴主義

タファール思考と概念思考の対立は、「詩 поэзия」と「散文 проза」, 「芸術 искусство」と「科学 наука」の対立というようにポテブニャーによって換言される。つまり、ポテブニャーは言語の発達とともに人間の思考形式が変容し、世界認識の様態が変化すると考えたのである。

1. 3. 言語と芸術作品の構造的相似

語を外的形式（音）・内的形式（表象）・内容（意味）という三要素に分割する方式を、ポテブニャーは様々な芸術領域における芸術作品の構造に適用する。芸術作品では、外的形式は素材、内的形式は形象、内容は思想に相当する。例えば、彫刻家の場合は、外的形式＝大理石、内的形式＝大理石のうえに彫刻される形象、内容＝象徴化された思想となる。文学者の場合、外的形式＝言葉、内的形式＝形象、内容＝構想（замысел）となる。



さらに、ポテブニャーは言語の発信者と受信者の関係を芸術の創造者と受容者の関係に当てはめる。芸術の創造者と受容者の相互関係においては、前者の一方通行的な観念伝達はポテブニャーによって否定され、芸術作品の内容は作者の意図にかかわらず受容者の意識の内部で独立に創造される。つまり、作品解釈は受容者の創造的行為ということになる。

言語と芸術作品の構造的相似を見出したポテブニャーは芸術作品（文化現象全般）に言語と同じような意味作用が存在すると考え、言語の分節方式（テキスト<段落<文<語<音素というような）を用いてその構造分析を試みる現代の文化記号論の発想に近い。また言語作品分析に言語学の成果を応用しようとしたヤコブソンら後代のフォルマリスト・構造主義者の手法に影響を与えた。⁷

2. ロシア象徴主義者によるポテブニャー援用の諸形態

2. 1. ブリュースフ

ベールイは回想記のなかで、1901年のスコルピオン出版社におけるブリュースフとの出会いについて触れ、「文学畑出身の作家のうちで唯一の厳格な学者」であったブリュースフが「当時、誰にも読まれていなかったポテブ

柿沼伸明

ニャーに没頭していた」と述べている。⁸ ポテブニャーの言語哲学を最初に発見した象徴主義者はブリューソフかもしれない。

ポテブニャーの直接的な影響のもとに書かれたブリューソフの論文は「詩という総合物 Синтетика поэзии」(1925)⁹である。革命後の著作であるが、象徴主義者によるポテブニャー援用のもっとも基本的な構図がこの論文で示されている。基本的構図とは、1) 民衆・民族 (народ) による言語の創造と詩人による詩 (言語芸術) の創作との同一視、2) 詩人による言語の美的機能追求が言葉の内部で喪失してしまった太古の表象を復活させ、無機質な記号と変じた言葉を活性化させるという論理展開にある。

「詩という総合物」の論旨を簡単に要約してみる——民衆・民族による言語の創造 (未知事象の命名) は認識行為に他ならない。同様に詩人もまた、自らの判然としない朧な感情 (未知事象) を既知の言葉をもちいて命名し、認識するのである。科学も芸術も真理の認識を目標としている点は同じだが、それに至る方法を異にする。科学は分析判断を手段とするのに対し、芸術は総合判断に依拠する。¹⁰ つまり、科学は既知の事象の分析を通してそこに既に潜在的に内包されている新たな内容を発見しようとする。本来的には所与の公理を分析し、そこから未だ認められていない個別的な法則を導出するという演繹によって真理を発見できればよいのだが、現実にはこれは不可能であるか、もしくはそうして得られた結論は仮説に留まらざるをえない。科学の分析判断は主として帰納によって達成される。すなわち、一つ一つの事実あるいは観察や実験によって確認された個別的な経験素材の分析から一般法則が樹立される。他方、芸術の総合判断は、既知の事象に対して演繹・帰納という悟性的な推論を適用して真理を求めるのとは異なる。芸術では、作者の世界観照 (миросозерцание) という真理が異種の概念範疇をもつ形象の総合により読者の感覚に訴える形で表現されており、逆に、芸術の鑑賞者は総合された形象から真理を発見していかなければならない。詩における形象の総合の最も典型的な手法が擬人法である。「るり色の空が笑っている лазурь небесная смеется」という表現にある「るり色の空」という主語の概念は「笑う」という述語の属性を内包しておらず、したがって擬人法を用いた文は総合的と言える。科学は抽象的なものを志向するという性質から語の形象性を廃棄し概念にのみ頼るが、芸術は形象を伝達媒体とする性格上、比喻を利用し語の内の喪われた表象を復活しようとする。このようにして詩人は概念化された言葉に太古の輝きを取り戻す。

2. 2. ベールイ

ベールイのポテブニャー受容という問題は、a) ベールイの言語に関する論文、b) 『コーチク・レターエフ』(1922)、という二領域に分けて考えられる。

a) ベールイの言語に関する論文

ベールイの言語論の代表的なものとして、①「言葉の魔術 Магия слов」(1910)、②「思考と言語 (А.А.ポテブニャーの言語哲学) Мысль и язык (Философия языка А. А. Потебни)」(1910)、③「アーロンの杖 (詩の言葉について) Жезл Аарона (О слове в поэзии)」(1917)の三点が挙げられる。ここでベールイは先に述べた象徴主義者によるポテブニャー援用の基本的な構図を繰り返すとともに、ポテブニャーの見解の歪曲改竄をおこなっている。これまでベールイ研究者はポテブニャーからの影響を指摘しても、ベールイによる歪曲改竄の事情には気付かなかった。ベールイ (及び後の未来派・フォルマリスト) のポテブニャー誤解についての論及は、ベールイ研究者でなく、ポテブニャー研究者から提起された。¹¹

ベールイの言語論の目的は、ポテブニャー理論の断片をコラージュのように適当に貼り付けながら、自らの非合理的な音のシンボリズム (ЗВУКОВОЙ СИМВОЛИЗМ) — 音素自体が聴覚以外の他の感覚やある種の心的情緒を喚起する力をもつとする主張 — を正当化することにある。その論理展開の過程で自分の都合のいいようにポテブニャー理論を改変するのである。ベールイの歪曲改竄の例証として次の二点だけを指摘しておく。

α) 論文②でベールイは、ポテブニャーが一定の母音は一定の情緒 (恐怖、愛など) を表現すると主張するドイツの言語学者ハイゼ (C. W. L. Heyse) の説を肯定的に引用し、また、民間口承では共感覚表現が頻繁に現われることに言及し、音素のもつ象徴的な感覚情緒の喚起力を認めている、と述べている。しかし、ポテブニャーの原典の該当箇所では、民謡のなかで共感覚表現がよく用いられることを認めながらも、感覚情緒と音素の結びつきを追究すること自体は非学問的と断ぜられている。¹²

β) 論文①でベールイは、ポテブニャーの『文学理論ノート』にある比喩の分析を持ち出し、比喩が形容辞 (эпитет) → 直喩 → 換喩と提喩 → 暗喩というように歴史的に発展し、暗喩が成立した時点で比較される二者が現実上の実在物と古代人にみなされた (「月は角である」という暗喩が成立すると、月が角をもった牡牛または牡山羊であると古代人は信じた) と述べているが、このような比喩の漸増的進化は『文学理論ノート』のどこにも論じられていない。ここ

柿沼伸明

でベールイは、古代社会では暗喩が文字どおりに受け取られ、神話上の生物が実際に存在すると思われていたというアフアナシエフの主張とポテブニャーによる比喩分析を折衷的に繋ぎあわせていると思われる。¹³

非合理的な音のシンボリズムを正当化するためにベールイが援用するポテブニャー理論の関連箇所は、上述した『思考と言語』の論旨要約 1. 1. 「言語の生成」の第一段階にある、古代人が未知の事象に際会したとき我知らず発した間投詞の音がその表象を持続的に喚起するという論拠である。ここから出発して、ベールイは音素自体に現在では忘れ去られた太古の感覚・情緒喚起力が具わっているという議論へと強引に飛躍する（この論法は①②③の論文に共通する）。ブリューソフは、詩の美的言語機能が言葉の内部で消失した太古の表象を蘇らすという主張の一線で踏みとどまっているが、ベールイは詩の音的效果によって言語発生期に存在したと仮定される音素の感覚・情緒喚起力を復活するという見解にまで突き進む。語の内部に埋め込まれた内的形式（表象）を活性化させるという発想は一定の客観性をもちえる。なぜなら、先の медведь の例で説明すると、現代ロシア人が「熊」を指し示す語として медведь を使用するとき、いちいち「蜜を食べるもの」という語源的意味を想起することはないが、медведь という語の成分には「蜜を食べるもの」という表象が確実に横たわっている。したがって、詩的言語の異化作用によって忘却された語の語源的表象を喚起させるという主張は客観的妥当性を有する。これに反し、太古にあった一定音素と一定感覚情緒の結合を復活させるという考えには何らの客観性も期待できない。そこでベールイは完全に主観的な音素の意味化の議論を展開するようになる（『グロソラリア』）。しかし、音が太古の感覚・情緒を呼び覚ますという見解は、いくら論証不能と言えども、ベールイの個人的な創作観の根幹に据えられている。音を靈感の源泉とする視座は彼自らの創作体験に由来している。¹⁴ ベールイによると、文学創造の過程では、まず音が出現し、次にその音が形象を導き、形象はリズムとプロット構成に従属しながら分節化・体系化され、最終的に文学作品が出来上がる。

作品は、形象が作者の聴覚によって知覚されてから、それが（社会的）需要に適ったかたちで提出されるまでの過程で、音からの形象の誕生、形象の成長と分節を通して形象体系への発展、最後にその体系に（思想的）傾向性が閃くこと——これは韻律化と同時に起こる——という三つの段階を経る。¹⁵

ポテブニャーとロシア象徴主義

b) 『コーチク・レターエフ』

言語に関する論文で主観的な音のシンボリズムを導出するためにベールイはポテブニャーの言語哲学を歪曲改竄していると述べたが、彼の前衛小説『コーチク・レターエフ』では、これが創造的に発展させられている。この小説の意味的核心と考えられるのは、『思考と言語』の論旨要約 1. 2. 「言語発達にともなう思考形式の変容」で説明した命題である。つまり、言語発展の初期段階では語彙の限局ゆえに人間は表象を操作して暗喩的にものを考えたが、語彙数が増大し概念が確立されると概念的に思考するようになるというポテブニャーの見解が、この小説では言語習得に応じて幼児がいかに思考形式・世界認識を変化させていくかの描写に適用されていると言える。人類が経てきた言語発達と思考形式の相互作用は、言語能力の向上にしたがって外界認識を変容させていく幼児の意識のなかでも繰り返される。古代人の言語創造と幼児の言語習得をパラレルに置く考えはポテブニャーの著作自体に存在する。ベールイはこれに刺激を受け、文学的に具現したと考えられる。ポテブニャーが幼児特有の思考法に着目している有名な箇所を以下に引く。

私は言葉を話し始めたばかりの子供に、球形で曇色のランプの笠を指差して、「これは何だい？」と質問してみる。子供は何度もそれを目にしているのだが、注意を払っていなかった。彼はその笠を知らないと言える。なぜなら、印象を残したということだけで知識が構成されるわけではないから。私は、子供が笠を目にしたときの印象を新しい印象で補完するよりも、そのときの印象をまとめ、自覚され秩序づけられた印象のストックに関連づけることを望んだ。私の質問に対して、子供は「スイカだよ」と答えた。この際、命名による認識、つまり、認識対象と既に認識されたものとの比喩比較 (сравнение) がなされた。子供の答えは、「いま僕が目にしてるのはスイカと似ている」ということを意味する。

子供が白いガラスの球をスイカと命名したとき、スイカの緑色の皮や、筋条になった赤い中身や、甘味をこの球に結び付けたわけでない。半面、子供は果実の意味でのスイカという言葉にこのような属性をも認めている。既知の語の意味から抽出され、新しい意味を得た属性は、球状ということである。この属性はまた「スイカ」という語の意味の徴表 (знак) でもある。別の言い方で表現すれば、徴表とは比較され思考の対象とされた二個の複合物の共通項、あるいは語内の比喩の根拠、比較の第三部分 (tertium comparationis) である。¹⁶

ポテブニャーはここで子供のメタファー思考と古代人の命名が原理的に等しいことを示唆している。幼児は未知の事象 (A) からその属性の一つ (x) を

柿沼伸明

抽象し、既知の事象（B）に結びつけ、AをBでもって表現する。上の例でいうと、A＝ランプの笠、B＝スイカ、x＝球状となる。『コーチク・レターエフ』に出てくる、路上で遭遇したセント・バーナード犬をライオンと誤る場面は幼児による命名行為を示している。「群がり рой」と「整序 строй」も形象的メタファー思考段階にある児童の知覚のプロセスを意味する。子供は複数の事物に共通する属性を見出し、それらを一つの範疇に分け入れる。この類別化作業が「群がり」と呼称されているのだ（それぞれ異なるものが一つの範疇に「群がり集まる」）。そうして出来た範疇は数を増し、体系化される。それが「整序」である。不断に感覚を通して子供の意識に入ってくる印象は、このような表象操作によって有機的に関連づけられ、整理されていく。

『コーチク・レターエフ』は極めて精密な構成をもっている。小説は六章構成で、その各二章が三歳、四歳、五歳にあたる。三歳のコーチクは形象的メタファー思考をもって世界を受容するが、外界からの知覚情報を消化する受け皿が整っておらず、混沌のうちに投げ出されたかのように感じる。この状態は水・海・洪水・大洋のイメージに喩えられている。四歳は形象的メタファー思考から概念思考への移行期間である。そして、五歳にして概念を操って思考することに慣れる。この状態は大地・岸・陸地のイメージで表現される。コーチクの内的成長にあわせて、彼によって認識される世界の領域（子供部屋、戸外への散歩、田舎の領地）も拡大していく。一章から六章までの各章の分量は終わりに近づくにしたがって増大していき、コーチクの認識範囲の螺旋的拡大と比例する。最初、感覚印象の洪水に投げ込まれた幼児は、それを意識のうちに整理統合していく技術を編み出し、言語能力の向上にともなって形象的メタファー思考から概念思考へと認識の手段を変化させ、外界認識を段階的に広げていく。つまり、『コーチク・レターエフ』は、海から陸への子供による世界認識の旅について描かれた物語なのだ。

ベールイが著わした詩や散文には「音の管弦楽法 звуковая оркестровка」と名づけられる多彩な音的效果を狙った文学手法が登場する。それは単なるテキストの装飾としてだけでなく、一定の感覚・情緒内容と一定音素の結びつき（синтенемия）¹⁷を文学に反映させようという作者の意図の下に合目的的に導入される場合もある（例えば、「л», «пл», «бл」という子音反復を、「光」「輝き」「明朗」の描写に充満させるといような手法）。音と感覚・情緒の交錯は個人的な経験であるが、ベールイは言語生成期には音自体に特殊な力が宿って

ポテブニャーとロシア象徴主義

いたと主張することで自らの経験を一般化したかった。そこでポテブニャーの間投詞の音による表象喚起という論拠を巧妙に利用した。『コーチク・レターエフ』ではこれと全く違う文脈でポテブニャーの別の論点が「応用」されている。プロットを度外視して幼児が受け取る些細な印象をひたすら描写していくことで、ベールイは言語と思考形式の相互作用という命題を成長過程にある子供の意識を材料にして例証したかったと考えられる。この面ではベールイはポテブニャーの言語哲学を創造的に文学化したと言える。

2. 3. Вяч. イヴァーノフ

イヴァーノフは「我々の言語 Наш язык」(1918)と「芸術の言葉の分野における最新の理論的探求について О новейших теоретических исканиях в области художественного слова」(1922)でポテブニャーに言及している。

イヴァーノフはソロヴィヨフ神学の枠内で独自の神話論を確立したと考えられ、ポテブニャーの直接的な影響は見極めがたい。しかし、彼の論理運びの細目には微かなポテブニャーの翳を発見できる。例えば——ポテブニャーは言語とならんで神話もまた古代人の形象的メタファー思考の産物と考えた。神話では、古代人の物質的生活の多種多様な側面が暗喩の働きによって異なった形象に置換されて表現されているというのだ。他方、イヴァーノフによれば、神話はシンボルから成長した (Только из символа, понятого как реальность, может вырасти, как колос из зерна, миф)。¹⁸「シンボル」とは「徴もしくは刻印 Символ есть знак, или означенное」と定義され、敷衍すると、「経験世界とは異なる現実の徴 символы, т. е. знамения иной действительности」である。¹⁹ 神話に登場するシンボルは形而上を指し示す多義的な徴であり、一種の宗教的な記号(映像的形象がシニフィアン、指示される形而上的内容がシニフィエ)という性格を具えていると言える。イヴァーノフの神話観では、まず祭儀における神の直接的啓示体験が根本にあり、それが古代人の意識内で強い「表象 представление」として残る。この表象は具象的な記号(神話の形象)に置き換えられ、記号体系としての神話へと発展する。²⁰ したがって、古代人の宗教体験という根源は一つであるが、様々の記号化＝神話が文化の多様性に応じて現出する。イヴァーノフが述べる啓示のシンボル化は、神話を古代の現実生活の暗喩的表現として理解したポテブニャーと共通点をもつ(ただ後者は、神話のなかに反映されている現実は宗教に限定されない社会生活全般を指すと考えた)。また、神話の出発点を宗教体験の表象に求めるイヴァーノフの発想には

柿沼伸明

ポテブニャーの表象理論を想起させるものがある。

イヴァーノフは「芸術の言葉の分野における最新の理論的探求について」でシクロフスキイのポテブニャー批判に触れている。シクロフスキイは「ポテブニャー」(1919)と「手法としての芸術」(1919)の二論文でポテブニャーの表象論に反論を加えた。シクロフスキイは、ポテブニャーが詩の音的效果や実用言語と詩的言語の相違に着眼していないことを指摘し、文学作品の形象は知覚を新たに体験させる異化作用をもつと主張する。筆者には、シクロフスキイのポテブニャー批判は的外れのように感じられる。その理由として、1) シクロフスキイはポテブニャーが弁別している術語「表象」と「形象」を混同している、²¹ 2) ポテブニャーは「散文」と「詩」を独特な意味(概念的思考と形象的メタファー思考の代用として)で使っているが、シクロフスキイはこれを考慮していない、3) ポテブニャーは言語の発達と芸術作品の構造の議論を分けているが、シクロフスキイは異なった次元の話の同一座標に置いている、という点が挙げられる。ポテブニャーは形象性(образность)という内的形式を仲立ちとして語と芸術作品の類似した「構造」を問題にしており、他方、シクロフスキイは文学作品で使用される詩的言語の独特な「機能」に注目している。そもそも双方の議論の土俵が異なっている。イヴァーノフは、知覚を困難化させる散文の形象に関するシクロフスキイの主張を高く評価しているが、ポテブニャー理論は不動のものだと言う。さらに、ポテブニャーと『詩的言語叢書』を対照させて次のように述べている。

ポテブニャーは、(私の意見を言うなら)詩句が呪文の文句として発生するうえでリズムと並んで大きな役割を果たした音彩について、しかるべき注意を払わなかったのに対し、『詩的言語叢書』の著者たちは、形象的思考の問題を閑却するかのよう、形象の役割についてしかるべき注意を払っていない。²²

「音彩 звуковой жест」と訳したのは母音反復や子音反復のことで、イヴァーノフは、バールイや未来派や初期フォルマリストが重大視した詩の音的效果にポテブニャーが関心をもたなかったことを認め、反対に、初期フォルマリストに対しては、もっぱら音の問題だけに議論が集中しているが、もっと芸術作品の形象にも目を向けるよう注意を促したのである。

3. 結語

以上見てきた通り、象徴主義者によるポテブニャー援用の形態は一様でなく、一定の定式で概括することは困難であるが、最低限として先にも述べた二つの共通論点（民衆・民族による言語の創造と詩人による言語芸術の創作との同一視、そして、詩人は記号化した言語から喪われた表象を復活させるということ）が見出される。第一の論拠は、象徴主義者は決して民衆・民族から分断された存在でないという主張を言語論の側面から引き出した結果であると筆者は考える。ポテブニャーの論に従えば、民衆・民族が為した形象的メタファー思考の直接的な産物の代表的なものが言語と神話だが、両者とも暗喩の原理に基づく現実認識を反映しており、それゆえ詩的な形成物と言える。詩人の創作もまた形象を媒介とした一つの総合判断形式の認識であり、民衆・民族による営々たる詩的創造の歴史を継承するものだ。また、象徴主義者は語内の忘却された表象の再生を志向することで民衆の暗喩的な現実認識に接触し、民族的な根源へ回帰する契機となる。第二の論拠は、象徴主義者の二言語観を反映している。実用言語と詩的言語の機能の相違という構図はフォルマリストによって明確に打ち出されたが、象徴主義者も同様の観点を抱いている。彼らの言語観によると、詩人の秘めやかな内的経験（後期象徴派になると「高次の超越世界」）は一義性を強いる日常言語では表白され得ず、多義的な詩的言語によってしか外化されない。象徴主義者はこのような二元的な言語観を理論化する補強材として、ポテブニャーの「概念化した言語」と「内的形式を保った言語」という対立図式を利用した。表象を温存させている語は語形成力に富むという論脈からポテブニャーは後者を「生きた言葉 живое слово」と呼ぶ場合があり、この名称はその対義語「死んだ言葉」を容易に連想させ、象徴主義者が抱懐する日常言語に対する詩的言語の優位という考えに貢献した。

（かきぬま のぶあき・日本学術振興会特別研究員）

注

- ¹ См.: Weststeijn W. G. A. A. Potebnja and Russian Symbolism // Russian Literature. Amsterdam, 1979. Vol.7. No.5. P.443-444; Иванов Вяч. Вс. Очерки по предыстории и истории семиотики // Избр. труды по семиотике и истории культуры. М., 1998. Т.1. С.646-655.

柿沼伸明

- ² 原題「Мысль и язык」(1862)。テキストには第2版(Харьков, 1892)と論集「Эстетика и поэтика」(М., 1976)収録のものを使った。
- ³ 以下、象徴主義者の項も含め、языкを「言語」、словоを「言葉」または「語」(複数形の場合は主に後者)と訳し分けた。但し、языкと単数形のсловоがほとんど同意義で使われることも多い。
- ⁴ 本筋から外れるが、バフチンは『マルクス主義と言語哲学』のなかでポテブニャーの言語論を最近の二大言語哲学思想のうち的一方(個人主義的主観論)に分類している(『マルクス主義と言語哲学』改訳版、桑野隆訳、未来社、1997、72-73頁)。バフチンの言う言語哲学思想二潮流とは、言語起源論(個人主義的主観論)とラングを考察対象とする一般言語学(抽象的客観論)とに言い直すことができる。個人主義的主観論は「言語現象の解明を個人的な創造行為に還元する」手法とバフチンによって特徴づけられている。たしかにポテブニャーは言語生成の第一段階に論及する際、精神(感情・理性・意志)を表象の関連付けに帰する心理学の手法から最始源の意味の形成を説明しようとした。シュタインタール(H. Steinthal)、ロッツェ(H. Lotze)、ラツァルス(M. Lazarus)、ヴント(M. Wundt)など19世紀後半のドイツの心理学者・哲学者からの引用はそのためである。しかし、言語生成の第二段階以降、暗喩を用いて語の増殖を行なうという論旨は、個人心理への還元主義と言えるだろうか。瀬戸賢一『メタファー思考——意味と認識のしくみ』、講談社現代新書、1995は、英語と日本語の造語法・表現法の比較を通して、暗喩による語形成・表現形成の共通性、その背後にある空間・時間の認識の類似性を明らかにしている。これはポテブニャーの言語理論が単なる個人的心理現象の解説でなく、言語発達に固有の法則性を究明しようとしたことを意味していないだろうか。
- ⁵ 「語の内的形式」という表現は、ポテブニャーの発案でなく、フンボルトの術語(innere Sprachform)を引き継いでいる。もともとはプロティノスが、外的物質的性質に対する内的非物質的性質の意味で「内的形式 endon eidos」という用語を確立し、それを18世紀にシャフツベリーが芸術作品の客観的形態に対しての内在的形成原理という意味で美学に適用したのを皮切りに、ルソー、ヘルダー、ゲーテ等によって一般的概念として使用されるようになった。フンボルトは語の内的形式を音と意味が結合する方式と定義し、ポテブニャーはこれを語の表象にまで発展させた。
- ⁶ См.: Потебня А. А. Мысль и язык. Харьков, 1892. С.142.
- ⁷ 例えば、次のようなジルムンスキイの評言。「ポテブニャーの理論体系は総体としてみると本質的な反駁を呼びおこすが、彼の著作で示された方法そのもの——言語に関する一般的学問である言語学と文学を接近させた方法——は極めて生産的であるし、広汎な承認をうけた」(Жирмунский В. М. Задачи поэтики // Теория литературы. Поэтика. Стилистика. Л., 1977. С.15)。
- ⁸ См.: Белый А. Начало века. М., 1990. С.185.

ポテブニャーとロシア象徴主義

- ⁹ Брюсов В. Синтетика поэзии // Собр. соч.: В 7 т. М., 1975. Т.6. С.557-570.
- ¹⁰ 「分析（総合）判断」という言葉はカントの用法を踏襲している。分析判断とは主語概念の内にすでに述語概念が内包的に含まれている判断で、総合判断は述語概念が主語概念の内に含まれない判断をいう。
- ¹¹ См.: Пресняков О. П. А. А. Потебня и русское литературоведение конца XIX-начала XX века. Саратов, 1978. С.156-165.
- ¹² См.: Белый А. Мысль и язык (Философия языка А. А. Потебни)// Логос. М., 1910. С.251; Потебня А. А. Мысль и язык. С.105, 108-109.
- ¹³ См.: Белый А. Магия слов // Символизм. Книга статей. С.440-448; Потебня А. А. Из записок по теории словесности. Харьков, 1905. С.201-299 (особенно, С.207-209); Афанасьев А. Н. Поэтическое воззрение славян на природу: В 3 т. М., 1995. Т. 1. С.7-8. ベールイ論文①②とポテブニャーのオリジナル・テキストとの異同は拙稿で詳述されている。См.: Какинума Н. «Звуковой символизм» А. Белого и теория происхождения языка А. А. Потебни // Голоса молодых ученых (Сборник научных публикаций МГУ). М., 1998. Вып.3. С.81-98.
- ¹⁴ 例えば、ベールイは『ペテルブルグ』のイメージ体系が音素 «у» から発生したと述べている (Белый А. Из литературного наследия Андрея Белого: Воспоминания. Т.3. Часть 2 [1910-1912]// Литературное наследство. М., 1937. Т.27-28. С.453-454)。
- ¹⁵ Белый А. Мастерство Гоголя. М., 1996. С.20.
- ¹⁶ Потебня А. А. Из записок по русской грамматике. Харьков, 1888. С.5-6.
- ¹⁷ “синтенемия” という術語は、感覚と感覚の交錯しか意味しない “синестезия 共感覚” の概念的限界から、ヴォローニン (С. Воронин) が提唱した。См.: Любимова Н.; Пинежанинова Н.; Сомова Е. Звуковая метафора в поэтическом тексте. СПб., 1996. С.74-75.
- ¹⁸ Иванов Вяч. Две стихии в современном символизме // Собр. соч.: В 4 т. Брюссель, 1974. Т.2. С.554.
- ¹⁹ Там же. С.537, 538.
- ²⁰ См.: Иванов Вяч. Дионис и прадиионисийство. СПб., 1994. С.269-270.
- ²¹ 「形象」についての理解がポテブニャーとシクロフスキイとでは食い違っているという指摘もある (Laferrière D. Potebnja, Šklovskij, and the Familiarity: Strangeness Paradox // Russian Literature. Amsterdam, 1976. Vol.4. No.2. P.179)。エールリッヒはシクロフスキイがポテブニャーをまともに読んでいなかったと考えている (Erlich V. Russian Formalism: History — Doctrine. The Hague, 1969. P.23)。
- ²² Иванов Вяч. О новейших теоретических исканиях в области художественного слова // Собр. соч.: В 4 т. Т.4. С.647.

柿沼伸明

Нобуаки КАКИНУМА

А. Потебня и русский символизм

В настоящей статье рассматривается вопрос о влиянии лингвистического наследия А. Потебни на творчество русских символистов (В. Брюсова, А. Белого, Вяч. Иванова).

Согласно взглядам Потебни, патогномический звук (междометие), произнесенный первобытным человеком при встрече с незнакомым явлением, оставляет в душе говорящего «представление» и через него формирует значение. Эти самые первичные слова служат корнями дальнейшего словообразования, которое совершается на принципе метафоры (замены частного частным). Признак, который абстрагируется из неизвестной вещи и связывается с известной, уже названной, является «внутренней формой» данного слова; например, в слове «медведь» лежит представление о «едащем мед». Со временем за счет автоматизации звука и значения забывается внутренняя форма, слово превращается в абстрактное понятие. До появления понятий люди мыслят иносказательно, посредством образного сопоставления, затем усваивают оперирование понятиями, открывающее возможность научного познания.

Символисты на основе потебнианского понимания слова развивают следующие идеи: 1) творение народом языка тождественно созданию художником поэзии; 2) попытка поэта активизировать эстетические функции языка воскрешает утраченную внутреннюю форму, оживляет слово, деградировавшее в статус безобразного знака. Эти положения самым ярким образом демонстрируются в статье Брюсова «Синтетика поэзии». Белый понимает звук как первичный формообразующий источник художественного вдохновения и как средство возбуждения чувственных ощущений и психологических эмоций. Писатель, не всегда правильно воспроизводя концепции Потебни, приходит к «звуковому символизму», своего рода фетишизации звука. С другой стороны, к описанию становления речи ребенка и языкового образа мира в повести «Котик Летаев» конструктивно применяется мысль Потебни о переходе по мере развития языка от образно-метафорического мышления к понятийному. В мифологию, созданную Вяч. Ивановым, входят компоненты потебнианского языкознания. Согласно его идее генезиса мифа, опыт непосредственного наития божества во время оргиастического культа запечатляет в сознании древних людей интенсивное «представление»; в поздние эпохи оно воплощается в мифе как символика. Потебня также считает миф одним из продуктов образно-метафорического мышления, отражающим действительность древних людей.

Таким образом, философия языка Потебни служила главным источником формирования воззрений символистов на поэзию.